

史跡上総国分寺跡発掘調査報告書

—国分寺庫裏建替えに伴う史跡上総国分寺跡発掘調査報告—

2004.3

市原市教育委員会

しせき かずさ こくぶん じあと
史跡上総国分寺跡発掘調査報告書

—国分寺庫裏建替えに伴う史跡上総国分寺跡発掘調査報告—

2004.3

市原市教育委員会

序 文

房総半島のほぼ中央に位置する市原市は、穏やかな気候と豊かな自然環境を背景に、古くから多くの人びとが生活する場所として栄えてきました。市内には随所にその痕跡が認められます。西広貝塚・祇園原貝塚・草刈貝塚をはじめとした縄文時代の大型貝塚や、日本最古の銘文を刻んだ「王賜」銘鉄剣が出土した稲荷台1号墳、上総国分寺跡・尼寺跡など、全国的にも注目される遺跡が数多く存在しています。

市原市では「ひとびとが生き生きと交流する輝きのあるまち」をめざして、宅地開発や道路網の整備をはじめとした大小様々な開発が進められています。遺跡などの埋蔵文化財は開発によって消滅していく運命にあり、保護・活用のための最低限の措置として発掘調査が行われています。開発と埋蔵文化財保護の調和をいかに図るか、また、出土品や発掘の成果をどのように後世に伝え、ふるさとの歴史や文化を学ぶ材料として活用して行くかが常に問われています。

本書は、上総国分僧寺跡内の医王山国分寺の庫裏の建て替えに伴い、国庫補助事業として実施した発掘調査の成果です。国分僧寺・尼寺跡は、市原市が古代上総国の政治・文化の中心地であったことを象徴する貴重な歴史的文化遺産として史跡整備が行われています。今回の調査はごく狭い範囲の調査でしたが、国分僧寺の建物に使われた多数の瓦が発見されました。また、この周辺に縄文時代のなかごろの集落跡が存在した可能性が高まるなど、興味深い成果を得ることができました。本報告が、市の歴史を理解するための一助となるよう祈念しております。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、御指導と御協力を賜りました、宗教法人国分寺、文化庁、千葉県教育委員会、財団法人市原市文化財センターをはじめとする関係者のみなさまに対し、深く感謝を申し上げます。

2004年3月

市原市教育委員会

教育長 山 中 齊

例 言

- 1 本書は史跡上総国分寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は現国分寺の庫裏建替えにともない、市原市教育委員会が財団法人市原市文化財センターに委託して行われた。
- 3 調査対象地は千葉県市原市惣社1丁目7番23の一部、調査対象面積は367㎡、対象地全域に対する確認調査である。
- 4 発掘調査は平成15年4月14日～4月28日まで行った。調査は高橋康男が担当した。調査コードはセ-374である。
- 5 本書の編集は高橋が行った。
- 6 本書で使用した方位は座標北である。公共座標値は旧系による座標値である。
- 7 掲載した遺物の縮尺は以下のとおり。
縄文土器断面・土器片錘1／3。土師器・須恵器・中世陶器のうち坏、椀、皿類は1／3、壺、甕、鉢は1／4。瓦1／5。なお、須恵器の断面は黒塗りである。
- 8 宗教法人国分寺代表役員大谷則夫氏には、史跡上総国分寺跡の環境整備に対し、多大な協力を賜った。
- 9 出土遺物および調査にかかる記録類は市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	3	(2) 奈良・平安時代の土器	7
第2章 調査の方法	3	(3) 中世陶器	7
第3章 確認した遺構	5	(4) 瓦	7
第4章 出土遺物	5	第5章 まとめ	10
(1) 縄文土器等	5		

挿図目次

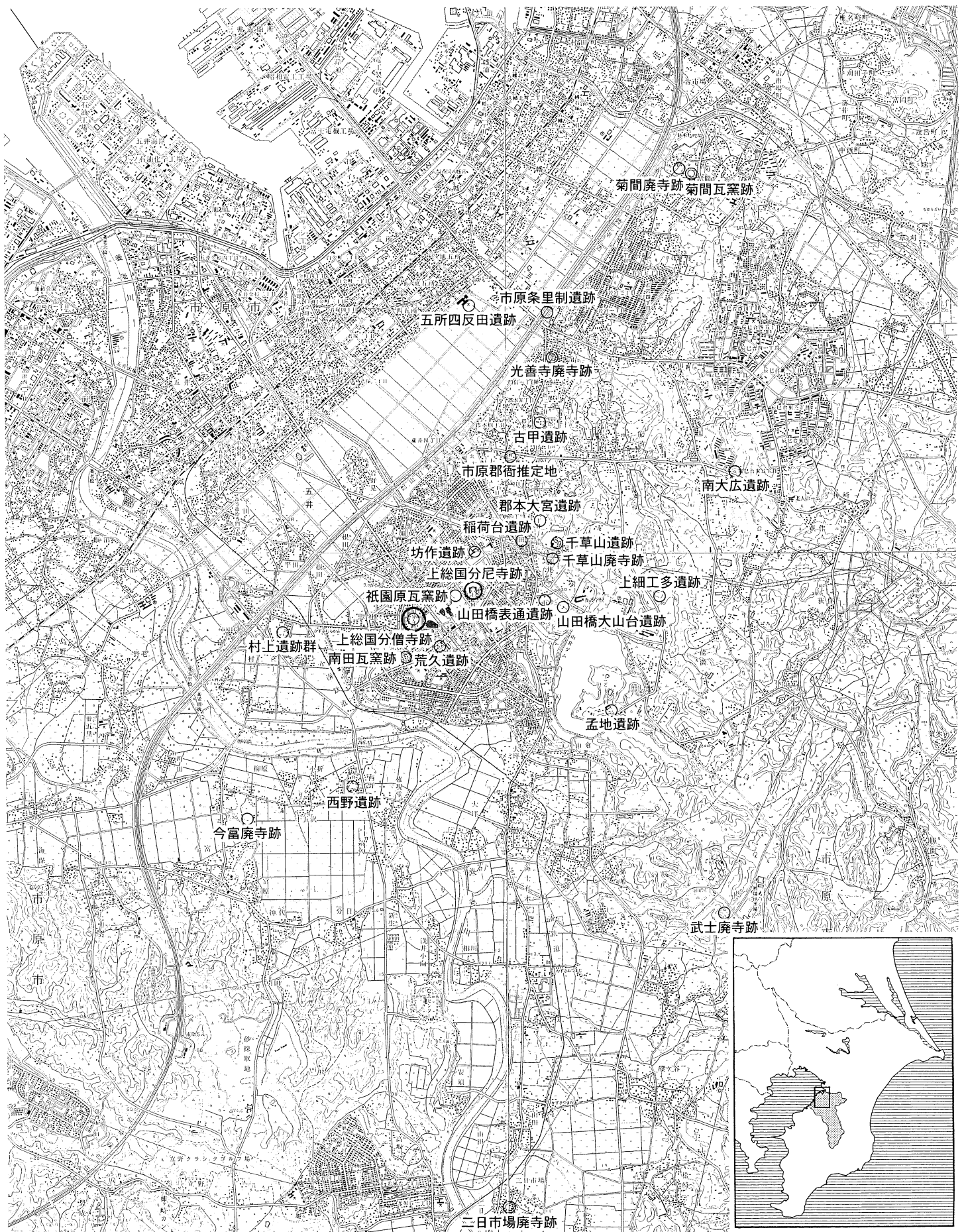
第1図 遺跡位置図	1
第2図 上総国分寺と周辺の主要遺跡	2
第3図 今回調査範囲全体図	4
第4図 出土遺物実測図(1) 縄文土器等 奈良・平安時代の土器(1)	6
第5図 出土遺物実測図(2) 奈良・平安時代の土器(2) 軒瓦	8
第6図 出土遺物実測図(3) 平瓦 丸瓦	9

表目次

表1 出土瓦総計表	11	表5 022出土平瓦(左撚り)経緯分布	11
表2 細かい布目の平瓦の経緯分布	11	表6 南田瓦窯燃焼室平瓦(左撚り)条節分布	11
表3 細かい布目の丸瓦の経緯分布	11	表7 南田瓦窯燃焼室(左撚り)経緯分布	11
表4 022出土平瓦(左撚り)条節分布	11		

写真図版目次

1 : 遺構 2 : 土器等 3 : 瓦



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

第1章 遺跡の位置と環境 (第1・2図)

本章で、上総国分寺跡およびいわゆる国分寺台地区全体にわたる歴史的様相を記すのは、紙幅の都合上困難である。ここでは、今回の調査地点周辺の様相を中心に状況を記すこととする。

今回調査したのは、医王山国分寺の本堂の西に隣接する部分である。古代の上総国分寺の伽藍地の北西隅に近い部分で、講堂の西側にあたる。南北4.5町、東西3.5町の上総国分寺の寺域のうち、史跡の範囲外は、国分寺台地区の区画整理事業に伴う発掘調査により、ほぼ全貌が明らかになっている。また、主要な遺構についても昭和40年代の早稲田大学の調査および史跡整備にかかる発掘調査により、次第に明らかになりつつある。寺域は素掘りの溝で区画され、南北の軸は約15° 東に触れ、これは講堂の中軸線の触れに近い。伽藍地の区画は一本柱列を遺構として残しているが、中軸線は南北に近い。西門及び南大門は位置が確定している。伽藍地の北方には、建物跡が整然と配置された、いわゆる政所院の存在が明らかになっているが、北門と思われる遺構は検出されていない。東門は未確認である。金堂・講堂・中門・回廊・塔の配置はすでに知られているが、僧坊は未確認である。

東国最古級の神門5号墳、4号墳、3号墳が近接し、同時期の集落跡は中台遺跡として知られるが、これは上総国分寺跡下層遺跡でもある。国分寺の西側を南北に通る市道部分の建設に伴う調査では、弥生時代から古墳時代前期にかけての住居跡が密集していることが明らかにされている。なお、さきにふれた寺域の区画溝は、神門3号墳を避けるようにかぎの手状に屈曲することも判明している。

区画整理事業あるいは史跡整備にかかるこれら調査結果は、概要が公表されているが、正式な整理報告にはまだ多くの時間が必要である。上に触れたことの多くも、暫定的なものとして理解していただきたい。

今回の調査は、国分寺の庫裏の建て替えにあたり、当該箇所にも今後の史跡整備をすすめるうえで重要な建物跡が検出されるかどうかに意が注がれたが、同時に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡のひろがりがこの部分まで及んでいるかどうか、興味の持たれるところであった。

第2章 調査の方法

今回の調査は、調査対象地の全域の表土を除去する、いわゆる100パーセントの確認調査である。通常の10パーセントの確認調査では、重要な建物跡が捕捉されない可能性があるからに他ならない。

調査区には、これまでの国分寺跡の調査で設定してきたグリッド割を踏襲してグリッド番号を付した。公共座標は旧成果を採用している。(第3図)

確認した遺構についてはその性格に関係なく001から通し番号をつけたが、土坑・ピットについては、遺物が出土したもののみ番号を付した。遺構の一部については、その規模・性格等を把握するために、サブトレンチを設定して掘り下げたものがある。土坑・ピットについては覆土を約10cm下げて柱痕跡の有無を確認したものがある。この作業により地山に達したものがあるが、その類の遺構は、全体図で下端線をひいてある。

第3章 確認した遺構 (第3図)

結論から先に言えば、今回の調査では上総国分寺を構成する主要な建物跡の検出には至らなかった。以下には今回確認した主な遺構について記載する。

022は覆土から多くの瓦を出土した。遺構の確認段階では、瓦敷きの遺構かと思われたが、サブトレンチを設定して掘り下げた結果、土坑あるいは溝がいくつか複合しているものであることがわかった。最終的には隅丸の方形を示すこととなったものであるが、そこに至る経過までは追及しきれなかった。この最終段階で最も多くの瓦を投棄している。時期的には、相対的なものだが、東壁にかまどのある住居跡(027)を切っていることから、これよりは新しい。今回の調査では他に002が住居跡である。これは掘り込みのはっきりしないもので、わずかに東向きと思われるカマドの痕跡が確認されたものである。この二つの住居跡はカマドの焚き口付近でカマドの構築財と思われる瓦の出土があった。瓦自体からは詳細な時期の判別はし難いが、伽藍地内の占地であるところから、伽藍地に対する意識あるいは規制が弛緩した段階のものと考えられる。具体的な時期については、周辺の調査成果をふまえて考えるべきであろう。022出土土器は、8世紀に収まるものが多いように見えるが、上記の動向から判断して、022の掘削の時期を8世紀求めることはできない。

025は比較的多くの瓦を出土した土坑である。覆土はさほどしまっておらず、少なくとも主要な建物の柱穴ではないと判断した。003は近世以降のムロかもしれない。垂直に掘り込んでおり、その深さは2mに近い。覆土は全体に灰色味が強く、砂っぽいものであった。覆土からは瓦、近世陶器が多く出土したが、若干の中世陶器も出土している。底部から砂岩の塊が出土した。

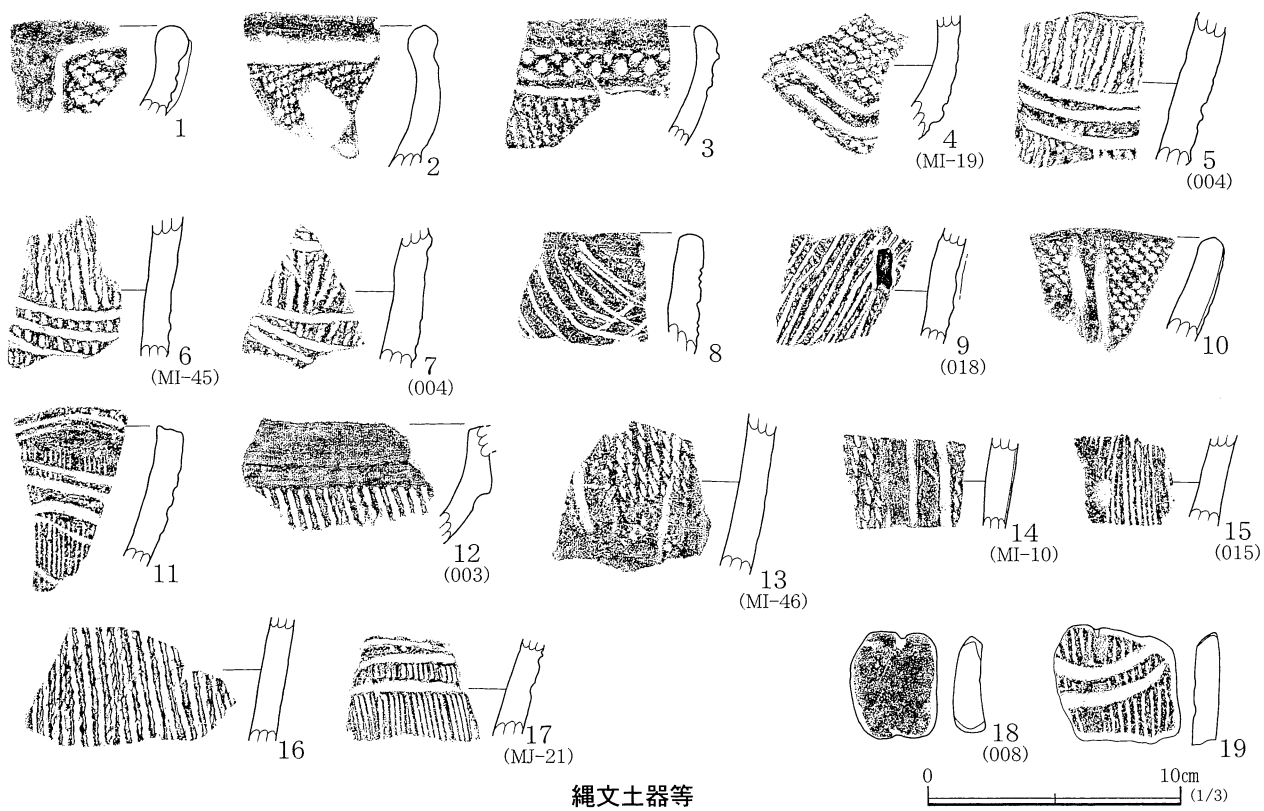
なお、国分寺以前の遺構は確認されなかったが、縄文時代中期後半加曾利E式の土器の破片がやや目立つ。弥生時代から古墳時代にかけての住居跡は確認されず、また同時期の遺物も皆無であり、当該期の集落はここまでは及んでいないことが明らかとなった。

第4章 出土遺物 (第4図～第6図)

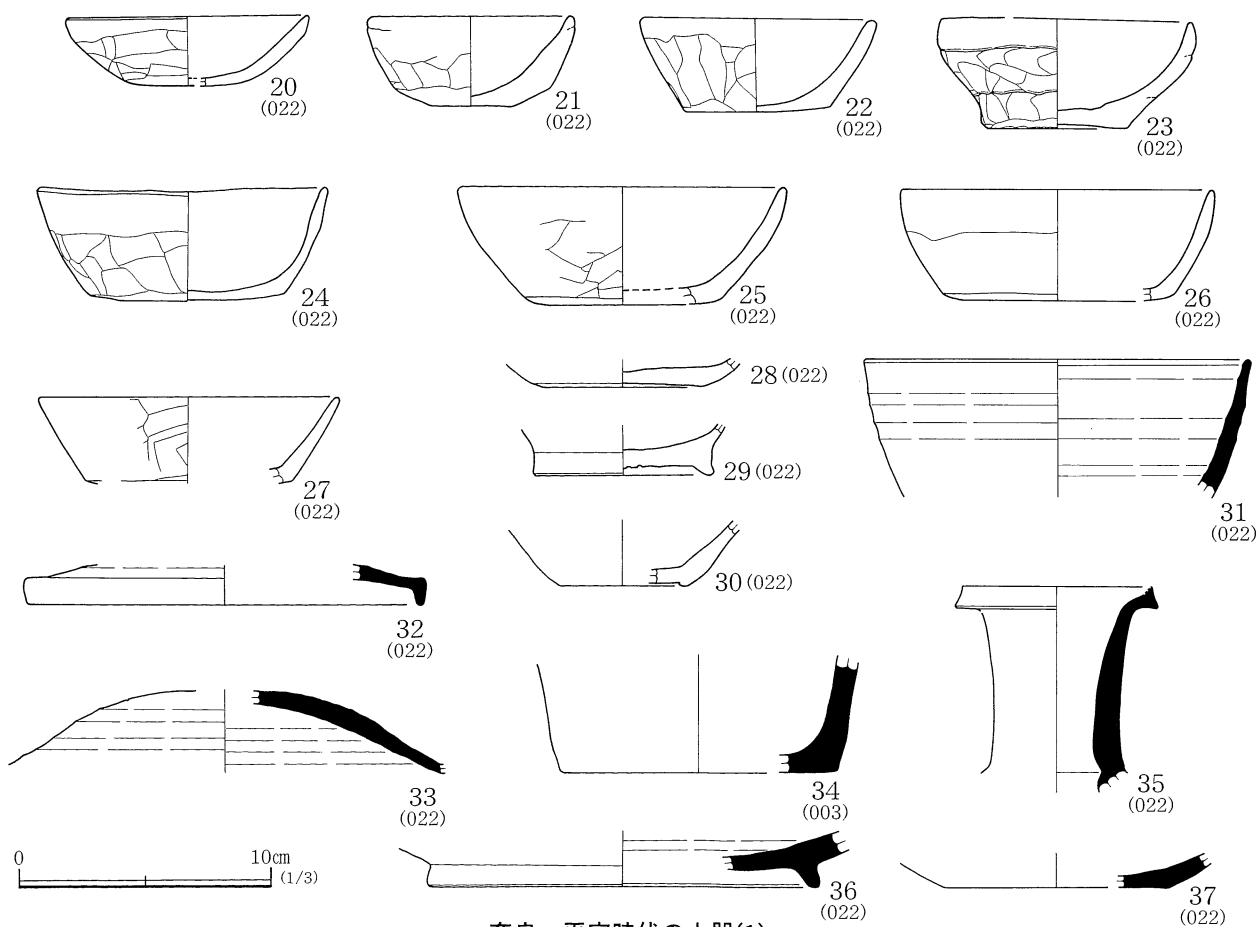
(1) 縄文土器等 (第4図1～19)

縄文時代の出土資料は、掲載した17点の土器片と2点の土器片錘、非掲載の土器片数十点である。時期は加曾利EⅡ式の新しい段階であり、非掲載資料も含めてほぼ単一時期の資料とみられる。わずかな資料であるが、この時期の集落が存在したことを示すものとして評価できよう。

1・2はキャリパー形深鉢の口縁部である。隆帯と沈線により口縁部の区画文を形成するもので、縄文は複節LRLである。13・14は地文が撚糸文の胴部破片である。3～7・17は連弧文系の深鉢である。3は口縁部、4は口縁近く、5～7・17は胴部の破片である。4は複節LRL、3・5～7は撚糸文、17は櫛状工具による集合沈線を地文とする。8・9は曾利系の深鉢である。8は一本引きの集合沈線を施す。9は縄文地文上に半裁竹管による平行沈線をひき、さらに隆帯を貼りつけている。10はキャリパー形の口縁部を省略したものであろう。11は波状口縁の土器でモチーフは連弧文系であるが例の少ないものであろう。口唇状は平らで沈線が2本ひかれている。鉢であるかもしれない。12



縄文土器等



奈良・平安時代の土器(1)

第4図 出土遺物実測図(1) (遺物番号の下は出土遺構・グリッド、無表記は遺跡一括遺物、以下同じ)

は外反する無文の口縁をもつ鉢の頸部付近である。15・16も以上いずれかの土器の胴部であろう。これらの土器群は、加曾利EⅡ式の新しい段階に属するもので、全部がほぼ同時期の資料と見て良いであろう。18・19は土器片錘である。18は無文の口縁を、19は連弧文系土器の胴部を素材としている。

(2) 奈良・平安時代の土器 (第4図20～第5図44)

20～29は022出土の土師器である。20は丸底に近く、21は手捏ねで糸切り痕を残し、22はやや小型、23は輪積み痕を残す。24から27は平底の坏で体部外面は手持ちヘラケズリ、これらは8世紀代の土器であろう。28～30は坏の底部。31～37は須恵器で32・33は蓋、34は鉢の底部、35は長頸壺、36・37は坏の底部で36はやや大振りである。33以外は022出土である。38から40は土師器の甕。37は器壁が薄い。41～44は遺跡一括資料である。41は市内永田・不入窯跡産と思われる高台付の坏である。44は非常に小型の皿である。

(3) 中世陶器 (第5図45～48)

45は常滑の片口鉢Ⅰ類の5-a期で13世紀中葉から第3四半期の製品、48は縁釉小皿、46・47は中世前半のかわらけである。(櫻井敦史の御教示による。)

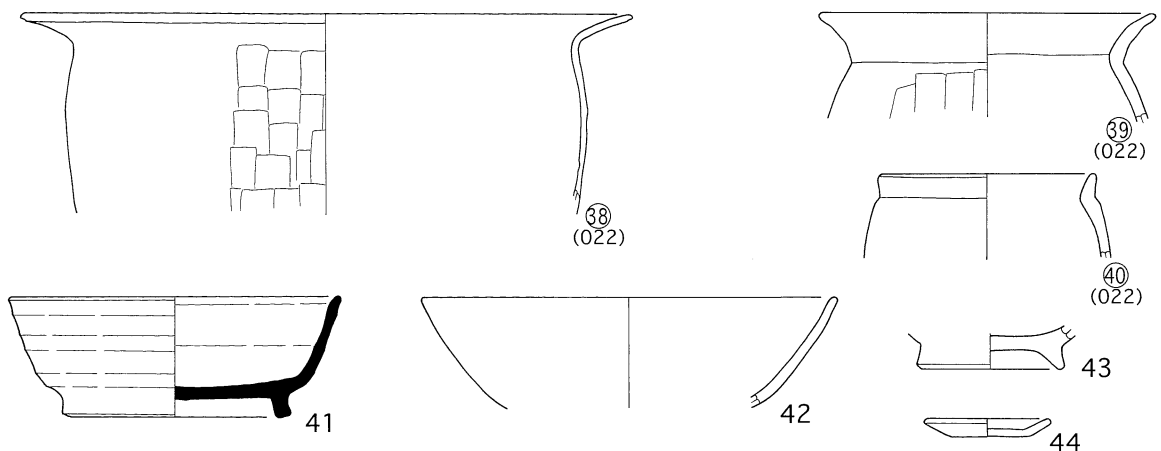
(4) 瓦 (第5図49～第6図71)

(Ⅰ) 軒瓦 (第5図49～57)

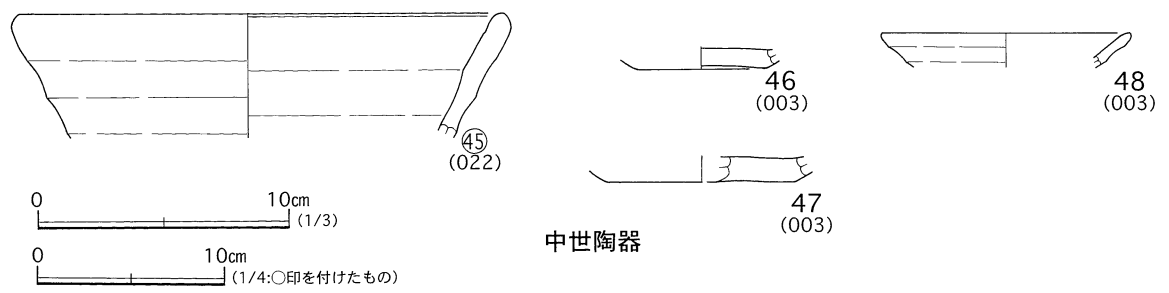
49～51は軒丸瓦でいずれも単弁二十四葉蓮華文で、上総国分寺の代表的な文様である。49は丸瓦は接合式でつけられており、接合位置はかなり上位である。丸瓦部の側縁から瓦当裏面にかけては曲線的に整形されている。50も類似した資料であるが、丸瓦部側縁と瓦当裏面の接合部分は直角に近く、直線的に整形されている。いずれも裏面に粘土が充填されている。51は前二者に比べ瓦当面が薄く、粘土の充填はないようにみえる。瓦当外周に型枠の痕跡らしき浅い段が巡っている。前二者では当該部分はけずられており、製作技法の相違と考えられる。52から54は上記軒丸瓦と組み合わせる均整唐草文軒平瓦である。52・53はいずれも瓦当部下端が鈍角に整形されており、53では外側の圏線まで削ってしまっている。いずれも文様の盛り上がりがすくない。54は比較的文様がくつきりしているものである。欠落部分が多いため、拓影のみ掲載した。55は重圏文、56も同様であろう。瓦当部下端が幅1cm前後けずられる、曲線顎Ⅱである。57は均整唐草文で、陰刻である。上総国分僧寺でも出土例の少ないものだが、類例は大網山田台No.3遺跡で出土している。褐色を呈し、重量感がある。

(Ⅱ) 平瓦・丸瓦 (第6図)

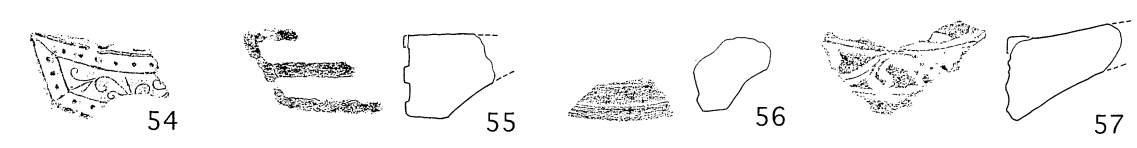
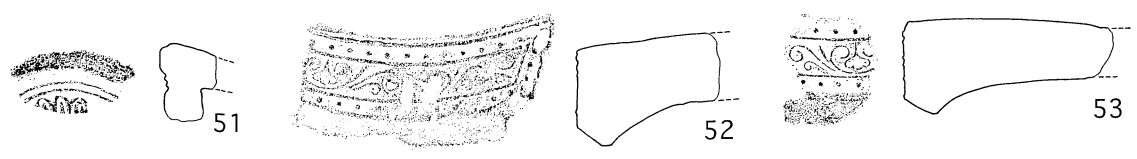
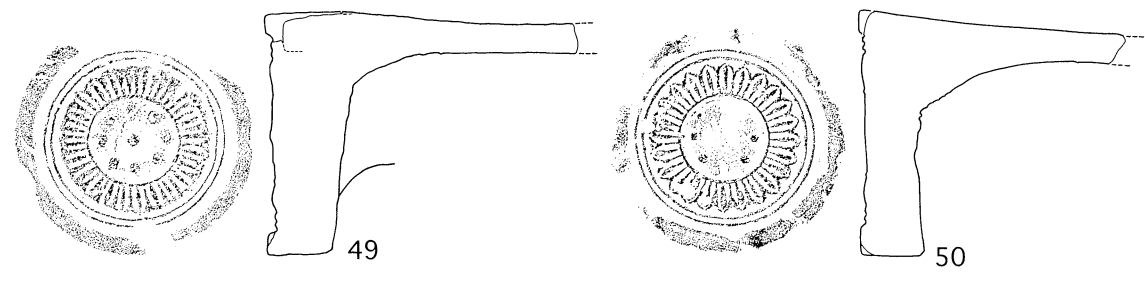
58から67は平瓦である。ここには凸面が縄叩きのもののみ掲載したが、格子叩きのものが、極少量出土している。縄や布目の特徴、端部の整形の特徴、色調等かなり多様である。59はそのなかで多数派といってよいもので、縄目は5cm四方で10条×8節で縄は左撚り、布目は1cm四方で7本×8本、凸面側縁は幅約1cm面取りされている。須恵質で灰色を呈する。これに対し、65は縄が右撚りで、布目が1cm四方18×19である。右撚りの縄と細い布目の組み合わせで、今回の出土遺物のなかでは、珍



奈良・平安時代の土器(2)



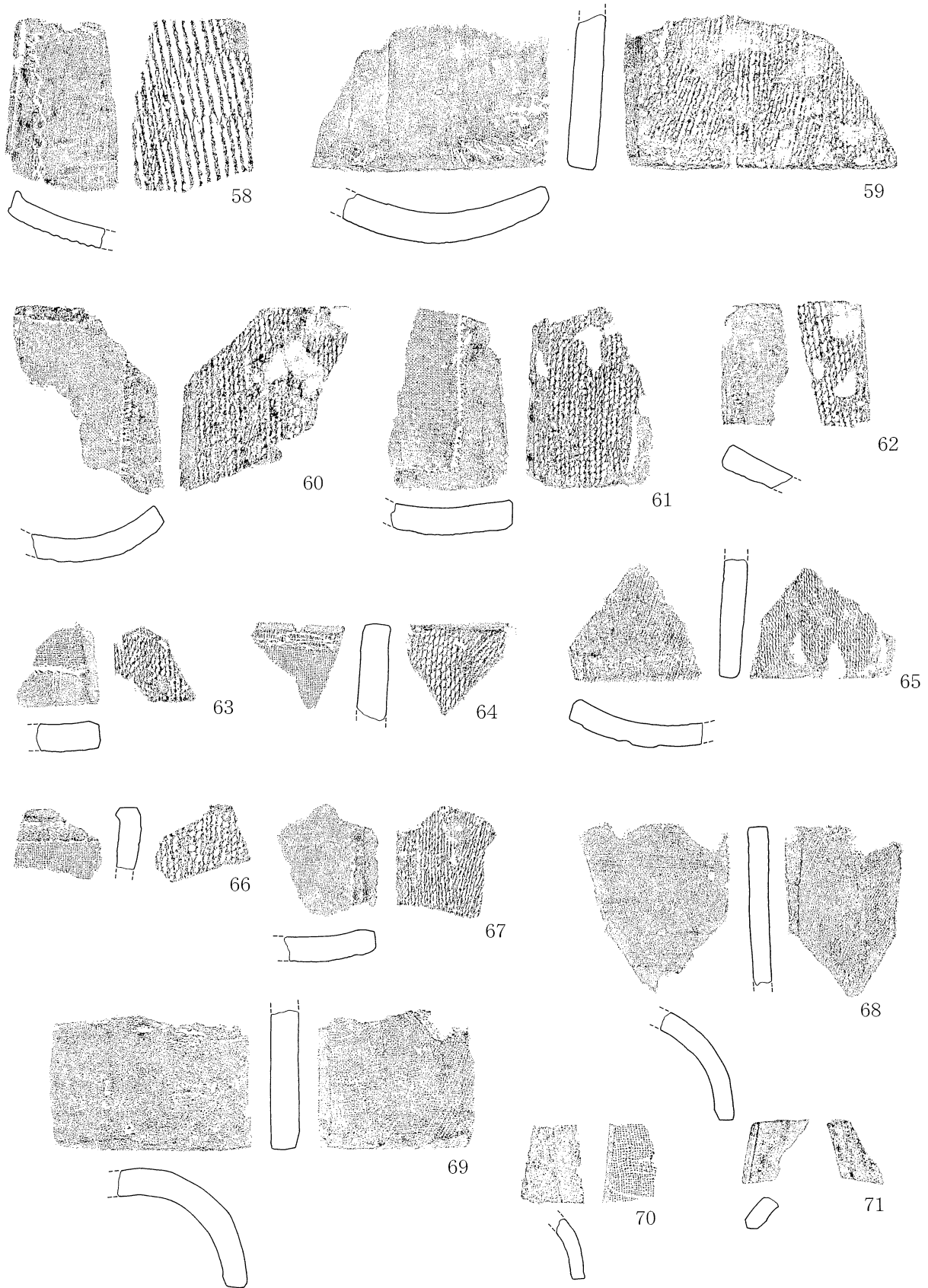
中世陶器



軒瓦



第5図 出土遺物実測図(2)



平瓦(58~67) 丸瓦(68~71)

0 10cm
(1/5)

第6图 出土遺物実測図(3)

しい組み合わせである。

68から71は丸瓦である。平瓦ほどではないが、整形・布目の特徴にはバラエティがある。68・69は一見類似したものだが、凸面の整形は68は横方向が明瞭で、69は判然としない。70はやや薄く、凹面の布目が粗い。71は側縁が三角形を呈している。

(Ⅲ) 全体の様相

今回の調査で出土した瓦の概要を表1に示した。数値は重量で単位はgである。瓦の種別は、一般的な分類にしたがったが、平瓦については縄叩きのものについて、縄の撚りの方向による分類を行った。丸瓦については、明瞭に段のある資料を有段として提示したが、本来は表示したよりも多くの有段の瓦があると考えておくべきであろう。なお、平瓦は、模骨痕および布の継ぎ目も認められないところから一枚作りによるものと判断している。

(Ⅳ) 細かい布目

上記の分類の過程で、一見して通常の瓦より細かい布目を有する瓦の存在することが判明した。厳密な分離基準を設けずに、やや主観的に抽出したものをまとめたのが、表2・3である。1cm四方当たり10本×10本から20本×20本が抽出された。これらのうち10×10あたりは一般的な布目よりやや細かい部類という理解も可能かもしれない。しかし、15×15を超えるものは県内の他遺跡での報告は見出せなかったところであり、ここで特異な一群として提起しておきたい。挿図の65はそのうちのひとつであり、写真図版にはステレオ写真で示した。

なお、本市収蔵遺物のうち、萩ノ原遺跡出土の平瓦に同様の細かい布目の一群がある。また、直接関係はないと思われるが、兵庫県氷上郡市島町の天神窯跡2号窯から20×20の布目をもつものがまとまって出土している。(名古屋大学 梶原義実氏よりご教示いただいた。)

(Ⅴ) 022出土瓦の縄目と布目

022のサブトレンチから出土した約200kgの平瓦の縄目と布目の様相について表4・5に示した。表6・7は上総国分寺の補修瓦を焼いたと考えられている南田瓦窯跡の燃焼室出土の平瓦のもので、比較対象資料として一部抽出して分類したものであり、あくまで暫定的なものである。

それぞれ、ある程度の測定誤差を含むものであるが、おおまかな傾向あるいは、量的なまとまりのあることは認めてもよいのではないかと考えている。南田瓦窯の資料と比較すると、022では縄目は粗い方に分布するものがやや多いように見え、布目では逆に粗い方の分布が少ないようにみえる。補修段階との時期差を示しているものかもしれないが、今後の検討課題である。

第5章 ま と め

今回調査した部分は、上総国分寺の講堂の西の隣接地であった。主要な建物跡の検出には至らなかった。このことは、僧坊が北面することを示唆するものと言えよう。

なお、紙幅の都合により参考文献は省略させていただいた。

遺構番号	軒平瓦	平瓦 左	平瓦 右	格子	平瓦	軒丸瓦	丸瓦 有段	丸瓦	隅きり瓦	磚	不明	計
1		630		160	110			40			45	985
2		2275	45		215	465	350	3030			120	6500
3		7490	315	255	1200		720	2640			4660	17280
4		100									340	440
5		4610	630		75			715			960	6990
6		895		65			410	395			170	1935
7		210						150			60	420
8		3330	170	260			300	790				4850
9		1040	90	40	105		115	700			775	2865
10		35					440					475
11			10					80			85	175
12		310			115			60			55	540
14		10						40			40	90
17		35										35
18								50			30	80
19		85						165				250
20		145										145
22	3200	110030	8450	535	10665	9950	265	45500	315	5250	16315	210475
24		305	55		65			15			115	555
25		4870	25		570		115	2940			450	8520
26		95									15	110
28		550			105		95	595			210	1555
29		335			80			370			175	960
31		120									30	150
32		215						85			10	310
33								80				80
35		180										180
36											105	105
排土他	1035	57940	6905	900	6615	200	3040	19860	180	950	9550	107175
計	4235	195840	16695	2215	19920	10615	5850	77850	495	6200	34315	374230

表1 出土瓦総計表(単位はg)

		緯												
		10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
経	10		1											
	11													
	12	1												
	13			2										
	14				1									
	15				1	2	2							
	16					1								
	17													
	18						1		2					
	19					1				1	1			
	20							1	1	2				
	21													
	22													

表2 細かい布目の平瓦の経緯分布

		緯												
		10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
経	10													
	11													
	12		2	1										
	13													
	14		1					1						
	15					1								
	16				1	1		1	1	1	1			
	17													
	18				2	5		3	2					
	19							1						
	20							3		2	1			
	21									1		1		
	22									1	1		2	

表3 細かい布目の丸瓦の経緯分布

		節													
		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14				
条	6		2		1										
	7		3	9	8										
	8	1	12	25	29	9	3								
	9		9	9	39	9	15								
	10	1	3	27	75	11	27	3	1						
	11		2	1	15	16	1	1							
	12			11	33	14	36		6						
	13			1	10	3	10		6						
	14			2	13	8	24		3						
	15				1	4	9	2	1	1					
	16					2	1	19	2	2					
	17														
	18						9		4						
	19											1			
20								1							
21															
22											1				
23															
24															

表4 022出土平瓦(左撈り) 条節分布

		節													
		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14				
条	6														
	7			1											
	8		1		1										
	9			1	4	2									
	10		2	2	3	5	1								
	11				3	3	2								
	12		1	1	1		1								
	13					3									
	14				2	1	4	1		1					
	15						3	3							
	16						1	3	1	1					
	17					1					1				
	18						1	1	1						
	19														
20															
21										1					
22															
23															
24										1					

表6 南田瓦窯燃焼室平瓦(左撈り) 条節分布

		緯										
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
経	3											
	4			8	8	1						
	5			4	18	18	1					
	6				19	58	37	4				
	7			1	4	38	64	24				
	8						16	21	6			
	9							9	6			
	10						1	1	4	1		
	11											
	12											

表5 022出土平瓦(左撈り) 経緯分布

		緯										
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
経	3		2	3								
	4	1		7								
	5			3	3	1	1					
	6				2	4	2					
	7					2	2	1				
	8					3	1	3				
	9					1		1				
	10							1	1	1		
	11									1		
	12										1	

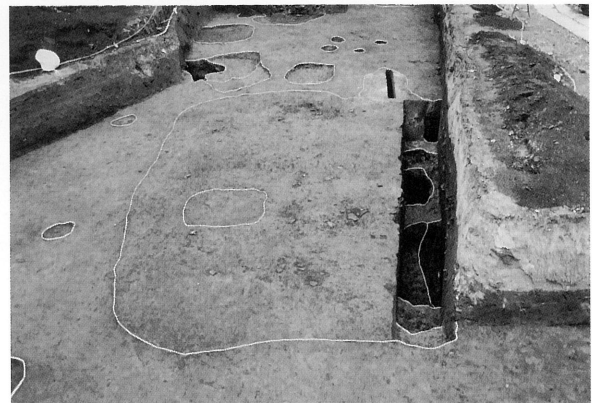
表7 南田瓦窯燃焼室平瓦(左撈り) 経緯分布



調査区全景



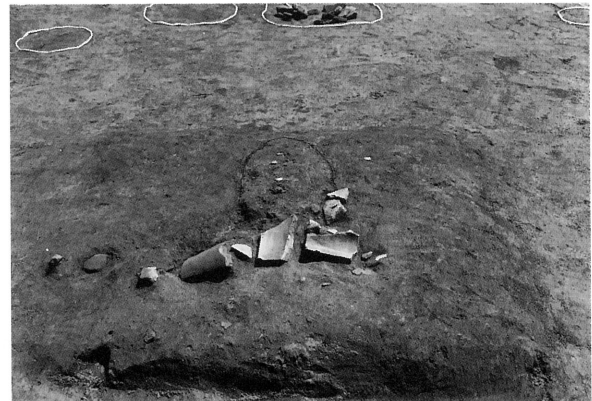
調査区と西門跡



022確認状況

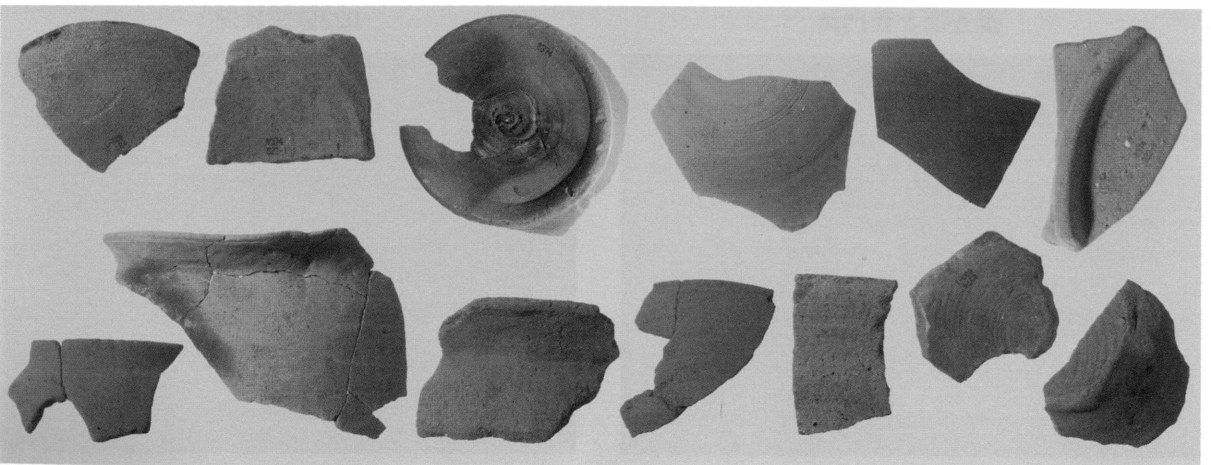
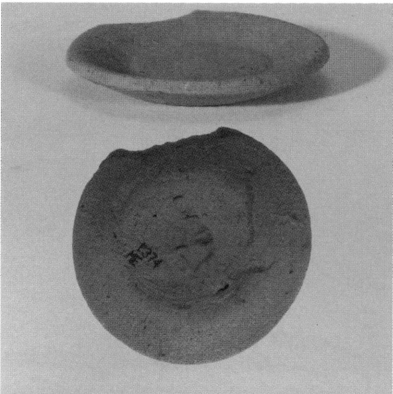
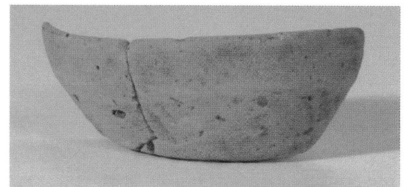
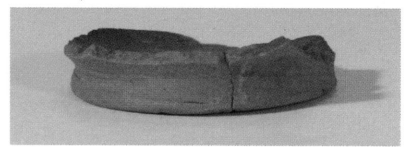
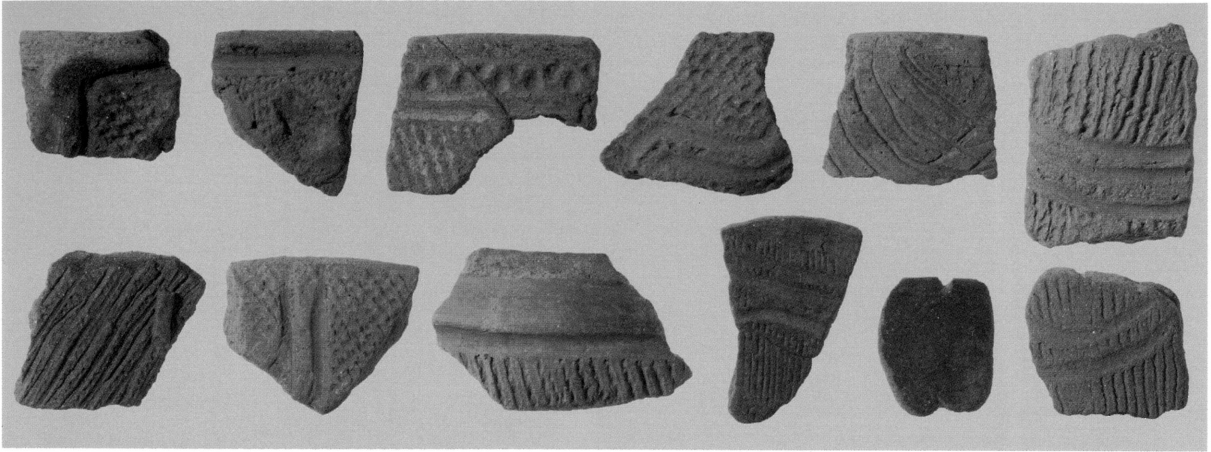


022断面

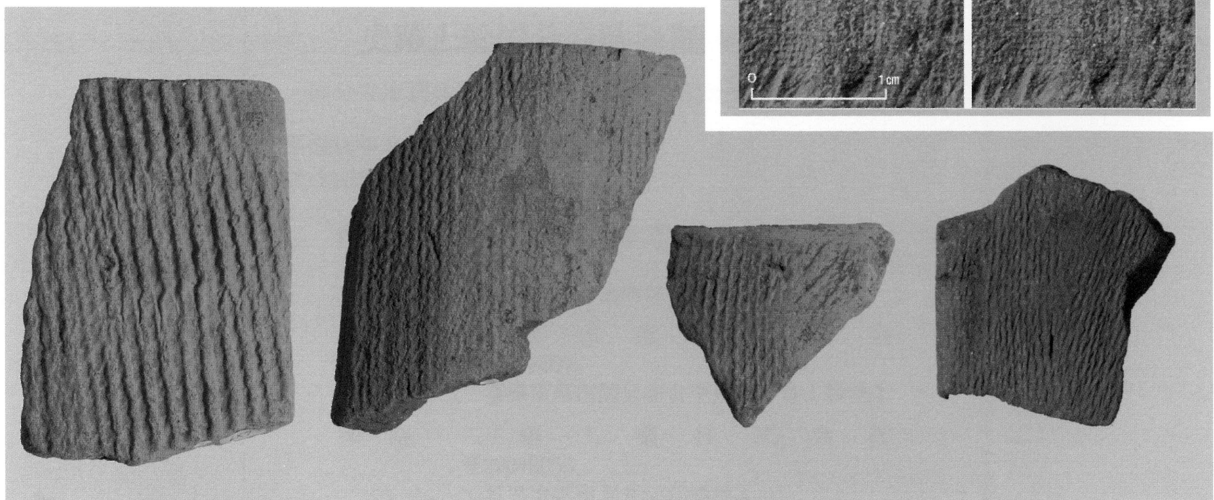
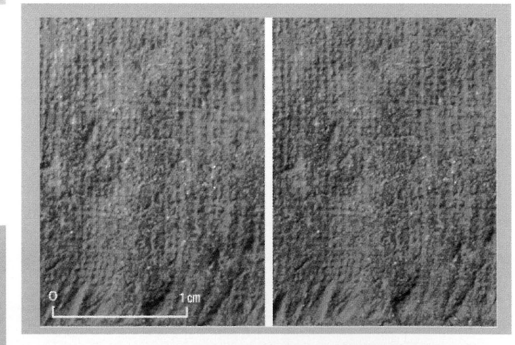
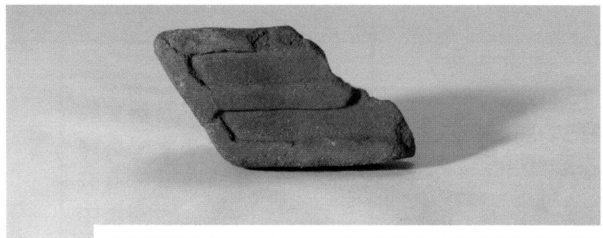
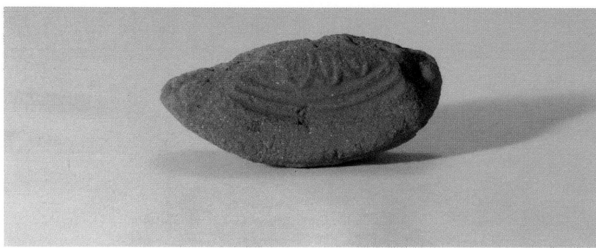


002確認状況

写真図版 2 (土器等)



写真図版 3 (瓦)



報告書抄録

ふりがな	しせきかずさこくぶんじあとはくつちようさほうこくしよ							
書名	史跡上総国分寺跡発掘調査報告書							
副書名	国分寺庫裏建替えに伴う史跡上総国分寺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高橋康男							
編集機関	財団法人 市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489 TEL 0436 (41) 7300							
発行年月日	2004年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき かずさこくぶんじあ 上総国分寺跡	ちばけんいちはらしそうじゃ 千葉県市原市惣社 1丁目7番23の一部	12219	七374	32° 29′ 48″	129° 46′ 4″	20030414 ～ 20030428	367m ²	国分寺庫裏 建替え
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡 上総国分寺跡	寺院跡	奈良・ 平安時代	住居跡 土坑	2	縄文時代中期土器 奈良・平安時代土器 奈良・平安時代瓦 中世陶器	講堂西隣接地の調査。 主要な建物は確認され なかった。		

史跡上総国分寺跡発掘調査報告書

-国分寺庫裏建替えに伴う史跡上総国分寺跡発掘調査報告-

平成16年3月10日 印刷

平成16年3月15日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター
〒290-0011
千葉県市原市能満1489番地

発行 市原市教育委員会
〒290-8501
千葉県市原市国分寺台中央1丁目1番地1

印刷 三陽工業株式会社
〒290-0056
千葉県市原市五井5510番地1